

中国化学会平成16年度シンポジウム

著者	白井 啓介, 大塚 秀明, 高橋 均, 佐藤 一樹
雑誌名	中国文化 : 研究と教育
巻	63
ページ	40-43
発行年	2005-06-25
URL	http://doi.org/10.15068/00150588

○中国化学会平成16年度シンポジウム

シンポジウム「漢学における日本近代への経路

——自己像の定立、他者像の形成——を企画して

企画担当常務理事 白井 啓介

二〇〇四年度中国化学会大会におけるシンポジウムを企画するに際し、選択肢はいくつかあった。例によって、学会内部でできること、あるいは会員か否かを問わず、広く公開の形で漢字文化圏の意味を問う等々、準備段階では、守旧派から冒険主義まで各種プランが飛び交った。

これまでのシンポジウム企画の傾向も考慮された。これまで、ややもするとコモンセンス的作品の読み解きから会員間の共通の問題を掬い取ろうとする、いわば「民意尊重」型民主主義が主調であったかに見えた。そこで今回は、大風呂敷、別の言い方をすれば啓蒙型独裁主義で行こうと、企画委員会は奮勇を奮うことにした。

そこで煮詰められたのが、「漢文」の意味を問う、という課題だった。我々は、明治時代までは描いて、少なくとも第二次世界大戦後、「漢文」を再生産のありえない遺産としてのみ問うことが多くはなかったか。「漢文」とは、それだけの「無形文化財」に過ぎなかったのか。あるいは、何らかの発展性を内在した付加価値が潜んでいたのか。こ

うした問題を取り上げ、広く会員間での意見交換と、認識の共有を図ることは意味があるのではないか。

高橋均氏には、これまでの氏の研究分野とは少し毛色が違うが、清代の風俗技芸を同時代江戸時代の漢学者らがどのように理解したか、『清俗紀聞』編纂の意図を例に、「漢字」が、当時すでに中国を媒介した科学的方法論への傾斜を持っていたことを指摘いただいた。

大塚秀明氏からは、氏の多様な研究蓄積の中から『水滸画伝』の画像の変容に着目し、中国を实在の外国文化として受容する萌芽が潜んでいたことを紹介していただいた。

佐藤一樹氏には、明治以降、漢学が近代洋学の一分野に封じ込められて行く過程を、明治の漢学者の事例を縦横無尽に引証して報告いただいた。

今回の企画では、これらの複合的視点が交叉して融合する、またはコラボレーションするまでには到らなかったが、本学会の研究方向に一定の展望をもたらしたのでは、と期待を込めて総括しておきたい。

最後に、今回の企画に協力いただいた各報告者、並びに会長はじめ学会役員諸氏、当日趣旨をご理解いただき、建設的ご意見を寄せられた会員各位に深甚の謝意を表する。

(文教大学)

馬琴訳・北斎画『新編水滸画伝』に見る中国イメージ

大塚 秀明

近世日本において中国像を考えるとき『水滸伝』がいかに大きな影響を及ぼしたか言を待たない。江戸時代の初め『水滸伝』が渡来し、その受容・翻訳・研究の歴史については高島俊男『水滸伝と日本人』（大修館書店、一九九一）という名著に詳しい。『水滸伝』は江戸中期に盛んになった唐話学の教本として、従来の伝統漢学とは異なる中国像を作り上げたことが考えられる。大衆の読み物としては江戸文壇の巨人曲亭馬琴と江戸画壇の巨人葛飾北斎の合作である『新編水滸画伝』が、文化三年（一八〇六）に初篇が刊行され、迂余曲折を経て天保年間に九篇が完結した。この『画伝』は江戸に止まらず明治・大正・昭和半ばにいたるまで読み継がれ、戦後一九四七年に岩波文庫の邦訳が出るまで、水滸といえど『画伝』を指していた。発表では、まず「国学、漢学」という名称が『画伝』初篇が刊行された文化年間に現れたのは伝統漢学とは異なる唐話学、蘭学、英学の出現による再命名と考えられることを述べ、次に「今われわれが見るとちつとも中国らしくない」絵について、これまでのプラス・マイナス両方の評価

を紹介し、あわせて具体的な図像を取り上げ考察した。

ひとつは、描き手の中国理解が疑われる絵を紹介した。

「人牽脱履靴鞋」と書かれていることから、中国も畳文化であると理解していたかもしれないこと、「人を殺す者は」にあたる中国語を「人殺者」という語順で書いてあることから、日本語と中国語では語順が違うことを知らなかったのかもしれないこと、謂わばマイナス面を述べた。いまひとつは、畑番をしていた魯智深がごろつきどもを肥溜めに蹴落とす絵に描かれた覆いのある肥溜めの形状が、『清俗紀聞』が載せる「庸鑿」に類似していることから、描き手は当時の限られた中国情報源を貪欲に収集し制作に利用したのではないかと述べた。『清俗紀聞』の刊行は寛政年間の一七九九年であるから参照したことは大いに考えられる。発表を終え、陳腐な結論ではあるが、異国の物語が図像として描かれるとき、そこには他者が描かれると同時に自己も描かれるのだとの思いを新たにした。（筑波大学）

『清俗紀聞』の三つの序をめくって

— 新たな対中認識への反響

高橋 均

中国からの渡来人、貿易商人、僧侶、そして日本からの

遣唐使などによつてもたらされた中国文化の直接の受容を
ごくわずかの例外として、我国への中国文化の伝達は、文
献資料を主とする間接的なものであつた。そうして作られ
る中国像は、歴史的時間軸をはなはだしく欠くものとなら
ざるを得ない。その時、例えば「三礼図」に描かれる諸物
によつて、同時代の中国を想定することはどれだけ可能で
あつたらうか。

「清俗紀聞」。その編者中川忠英（1753—1830）は当時
長崎奉行。彼の配下近藤重蔵（号、守重 1771—1829）が
企画し、長崎通詞と長崎在住の清国人及び絵師たちの共同
作業によつて、同時代の中国人の風俗・習慣・生活を図像
と言葉によつてビジュアルに描いたものである。編纂の目
的は、長崎に來航する清国人との交易のためのハンドブッ
クであつたが、当時の鎖国下の人々にとつては、異国の先
進諸事情を紹介するガイドブック・カタログ本として多く
の人々によつて歓迎された。

だがしかし、この「清俗紀聞」に描かれる図像が、実写
に近いがゆえに、文献によつて構築されていた伝統的中國
像とのあいだには大きな落差があつた。「清俗紀聞」には、
当時の学界を代表する大學頭林述斎、黒澤惟直、中井曾弘
等三人の序が付されているが、そのいずれの序にもこの落

差に対する戸惑いが見え隠れしている。「清俗紀聞」の図
像を、流行に目ざとい我国の人々が真似ることを懸念しな
がらも、長崎での交易によきハンドブックとなろうと、好
意的に認めるもの（林の序）、三代以来の伝統が清によつ
て華より夷に變じたが、この書に描かれているのは漢唐宋
の伝統が残る三呉の風俗で、これによつて古来の伝統を知
ることができる、古典理解の書として推薦するもの（黒
澤の序）、描かれる風俗が閩浙に限定されることを怪理解
解に有利であると認めておいて、実は閩浙に限定され、清
国全体に及ばないことを懸念するもの（中井の序）など、
長所を探しつつ戸惑っているように読める。とりわけ黒
澤、中井にその戸惑い大きい。

これを近代における対中國への認識でいえば、清朝が滅
び中華民國が生まれた時、民国に代わつて中華人民共和國
が成立した時、われわれが持った讚嘆・驚き・戸惑いと重
ねあわせて考えてみたい。

（大妻女子大）

漢学者の析出：明治前期の歴史編纂と漢文叙述をめぐつて
佐藤 一樹
他の地域にくらべ、中国文学が外国文学としての理念や
方法から研究されるようになったのが半世紀以上遅れたの

は周知のことだが、漢学者の見識の狭さや頑固さにその責
任を求める傾向がある。しかしながらそれは、漢学という
学芸・文化の一大体系が中国研究という領域に押し込めら
れることに抵抗したための遺産（負の遺産？）とみなすこ
ともできる。今回のシンポジウムで報告した、明治二〇年
代の近代歴史学の草創期に重野安繹や久米邦武らが、国史
編纂事業に関与し退場していく経緯も、そうした漢学者の
抗いの一つであった。

西洋近代の基準に沿って学問・教育体系が再編されてい
くなか、「漢学者は詩文の墨に拠るに非ざれば歴史に向ツ
て実用に活動せんと志した時代で、我輩も其一人である。」
と久米が後に述懐しているように、漢学は墓銘碑文、書の
序跋、それに詩といった私的、趣味的な世界で自足するの
でないとするれば、歴史学の分野に向かわざるを得なかった。
漢学は西洋の学問体系の基準との照合で文・史・哲に分類
されたが、その中で史学は西洋学問にもっとも有力に匹敵
する力があると考えられた。修史館における久米の同僚の
重野安繹は、西洋の実証史学よりも百五十年早く考証学が
すでに発達していたとして、近代歴史学においてもこれま
での漢学のなかの史学が存続できるとなお信念を持ち続け
ていた。

このように重野や久米は史学を拠りどころに漢学を普遍
的学問として存続させようとしていたが、その努力は文部
大臣となった井上毅によって水泡に帰してしまふ。井上は
正史を漢文で記述することへの反対から最後には修史事業
そのものを停止する。そして漢学については、「一支那の
経学は（近時の語にて哲学）倫理のために必要なり、二支
那の文字は国語の材料として必要なり」として、国家のた
めの忠孝倫理と日本語という「国民」創出のための文化的
源泉として位置づけたのである。普遍的世界を代表してい
た漢学を、日本という一国家からの視点で見始めたわけだ
が、漢学を外国研究として見なおすべきであるという考え



シンポジウム風景

も実は井上の視点を共有する
ことになる。それは四半世紀
後の京都支那学の成立から始
まることになるが、重野や久
米の跡を継ぎ、普遍的学問と
しての漢学をなお構想し続け
た者もいたのである。その詳
細については今後の課題とし
たい。（二松学舎大学）